
Labyrinth ~ 大迷宮の探索者 ~

藤宮雅隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Labyrinth ～大迷宮の探索者～

【Nコード】

N2360V

【作者名】

藤宮雅隆

【あらすじ】

とある事情によって冒険者育成機関「王立レグナル学院」に入學した、少年、フェイン。そこは「冒険者」と呼ばれる戦士たちが日夜、迷宮に挑むため訓練を続ける育成機関であった。安穩と自堕落な生活を夢見ていたフェインだが、そこで様々な仲間と出会い、フェインの人生の歯車は大きく動き始める。フェインの意味も、また・・・。

バトルあり、友情あり、恋愛あり、バカ話（！？）ありの学園奮闘

紀が幕を開ける！
駄作ですが、ぜひお楽しみください！

序章

全ては、暗黒の地に沈んだ・・・

かつてこの世界には「探索者」と呼ばれる人間がいた。
名の通り、

幾多の迷宮、

洞窟、

宮殿、

そして名も無き土地に挑み、巨万の富を目指して、己の持つ力だけを頼りに突き進む者。

このような人間にも、伝説と呼ばれる人間がいた。

これはそんな人間たちの葛藤、苦悩、奮闘、勝利の生き様を描いた、歴史の1ページである。

全ての真実は、歪んだ地の奥深く、古の玉座に居座る、呪われた王だけが知っている。

さあ、歴史の解読者となるがいい。

1 時限目 出会は急行列車の中で

友人はそれぞれわたしたちの中にある世界を表している。

その友人が来るまで生まれなかったにちがいない世界である。

その出会いによって初めて新しい世界が生まれるのだ。

- - - - - アナイス・ニン

俺は駅で列車を待っていた。

4

今日から冒険者育成機関「王立レグナル学院」へと通うためだ。
俺は昔からこの学院に通いたいと思っていた……わけでは
ない。

ただ、とある出来事が俺をこうさせるを得ない状況になったのだ。
まあ、そのあたりは追々語っていくとしよう。

以来、なんだかんだで俺は「冒険者育成機関」に通うに至っている。
前にも言ったが、この世界には「冒険者」と呼ばれる人間が存在す
る。

読んで字の如く、世界中のあらゆる未開拓地に挑み、

巨万の富、

高らかな名声、

そして、圧倒的な権威を得る者のことだ。
また、それらを得ることが無くとも、冒険そのものに憧れを抱き、
練り歩く者も数多く存在する。

だから、俺のように【ただ安穩と自堕落に学園生活を謳歌する】な
どといった目的で行く場所では本来ないのだが……

天は我を見放した。

ただ平穩に暮らしたいのに、俺は何故か、そういう素質の持ち主だ
つたらしく、やむなくこの学院に入学するハメになったのだ。

それもこれも、全部アイツのせいだ。全く、おせっかいな奴だ。

そんなことを思いながら列車を待っていると、プラットホームに立
つ1人の少女が俺の目に留まった。

華奢な体の割に大きめの鞆を両手で持ち、赤黒い制服に身を纏って。
どこか、そわそわして落ち着かない様子で辺りを見渡している。

「……………」

俺はなんとなくその少女を眺めていた。

あの制服はレグナールのものに間違いない。

首に巻いた赤いスカーフは1年生のものだ。

つまりは俺と同級生ということになる。

「……………」

ただ俺は無言でジーツとその子を眺めていた。

ジーツ……………。

……………なんか、やることないから見てるだけなのに……………
・ストーリーみたいだ俺っ！

後ろめたさを感じ、視線を戻す。

キツ キツ キツ キイイイイイイイー

列車特有の耳障りな車輪とレールの摩擦音がプラットホームにこだまする。

俺は乗客の流れに半ば巻き込まれるようにして、列車に乗った。

プッシュー ガタンッ

「おっ・・・と」

列車が走り出し、Gの衝撃を踏ん張りこらえる。

さて、開いてる席でも探すか。

今日は入学式のためか学生の乗員が多く、学院行きの列車はどこも満室だった。

半ば諦め半分で席を探すと、たった1つ。

先刻の少女が座り、他が空席のコンパートメント席があった。

ここで相席させてもらおうとしよう。

ガララッ

扉を開けると少女は何事かと身をちぢこませ俺を見た。

「あ、悪い。開いてる席が無くてさ。相席いいかな？」

もともとつり目で目つきが悪いので、できるだけスマイルを心がける。

「あ、はい。どうぞどうぞ」

少女はかしこまって席を勧めたので、向かいの席に座る。

「えっと・・・俺はフェイン。フェイン・ウィードリットだ。君も学院行きだろ？」

「あ、はいっ。えと、ユリウスです。ユリウス・ネウロードです」
ユリウスと名乗る少女はうつむき加減に返事した。恥ずかしがり屋なのだろうか。

「学院へは・・・まだかかりそうだな」

列車の隣では草原が流れていく。たまに牛や羊も共に。

「そう・・・ですね」

ユリウスも同じように窓を眺める。

「なあ、ユリウス・・・って呼んでもいいか？」

「あ、はい。じゃあ私も・・・フェインさん。で、いいですか？」

「ああ・・・でも俺、同い年だぞ？さん付けするほどの人間じゃない」

「あ、いえ。こういう喋り方は癖なんです。昔から」

「そうか・・・じゃ、ユリウス」

俺は改めて彼女に問いかけた。

「は、はい」

「もう職業は決めたのか？」

「はい。医師メディックにしようかと。父が医者なので」

「ふーん・・・そういや、ネウロードってどっかで聞いたことか・・・」

「それは・・・きっとお薬でしょう。ネウロード製薬ですよね」

「ああ、あれか・・・」

ネウロード製薬はこのベーリング大陸中に名が知られている、世界トップクラスの医療メーカーである。

薬といえばネウロード、という人間はこの地で8割を超えるだろう。

「私の家は代々、医療が盛んで。父は戦医としても活躍しています」

「へー・・・いいとこの娘さんだったんだね、君」

「そんないいもんじゃないです。私、半人前もいいところですから・・・」

その内、自然と沈黙が流れる。

騒々しいのは好きでもないが・・・こう静寂だとかなり気まずい。

健全な男子諸君よ。俺の思い、少しでも理解できるだろうか。

できる奴はトモダチ。

「あ、あのっ。フエインさんは何の職業クラスにするんですか？」
沈黙を破り、彼女が話しかけてきた。彼女もやはり、沈黙が苦手のようだ。

「ああ。俺は無難ソートマンに剣術士でいこうと思ってる」

「へー。腕に自信あるんですか？」

「まあ、な。不本意だが」

「え？」

「いや、こつちの話だ」

つい昔のことを口走ってしまった。悪い癖だ。

そうこうしている内に窓から学院が見えてきた。まるで1つの古城のようだ。

威圧感がここからでも伝わってくる。

「そろそろですね」

「ああ。ま、今後とも同級生ってことで、1つ宜しく」

俺は自然に右手を差し出した。

「あ、はい。こちらこそ」

ユリウスも自然に・・・俺から見て右手、つまり左手を差し出してきた。

「・・・それじゃ、握れんだろう」

「あっ。」、「ごめんなさい」

慌てて右手を差し出し、俺と握手を交わした。

ユリウス・ネウロード。

いい奴には違いない、な。

2 時限目 世界最年少の校長

ガタ ガタ ガタ ガッタン シュウウ

どうやら列車が学院に到着したようだ。

「さて。降りるか、っと」

座席から立ち上がり、鞆を持つ。

「あ、はい」

ユリウスも俺に続いて、立って鞆を持つととする。

ガタツ

「う・・・わつとと」

「・・・するのだが、どうにも重そうだ。さっきからずっと思っていたが、どうもこの鞆は俺が持つても大きいのに、なぜこんな鞆を華奢な女の子が持っているのだろうか。

ここは1つ、親切にしてやるか。

「鞆、近くまでなら持ってやるぞ?」

「あ、いえ。そこまでお世話になつては・・・」

「いいから、ほら。かわりに俺のを持ってくれ」

俺は無理やりユリウスの鞆を持ち、俺の鞆を彼女に預けた。俺も鞆を持つてはいるが、精々トートバッグくらいしかない小さな物だ。女の子でも十分持てるだろう。

「わわわっ。あ、そ、それじゃ、近くまでお願いします・・・」

彼女はちよつと恥ずかしそうにしながら、俺と並んで列車を降りた。しかし、そこそこの重さだな、これ。郵送で後から学院に送つてもらうって手段もあるのだが・・・。

「なんでこれ、自分で持ってきたの？」

「あ、その・・・いつも持ち歩いてないと、落ち着かないんです。体の一部みたいな気がして」

「ふーん・・・体の一部、か・・・」

何故だか、妙に親近感を持ってしまふ。

まあ、俺の場合、比喩表現ではないんだがな。

校舎の前では生徒がごった返ししていた。

何事かと思つたら、その向こうに掲示板が見える。

「なるほど、クラスか」

学生であれば、誰もが気になるものの1つ。それがクラス決め。

「波に吞まれると厄介だな・・・ユリウス、ちよつと待ってる」

俺は彼女を待たせ、掲示板を見てくることにした。

「・・・あ、はい。気をつけて」

なんだか、もうユリオウスの保護者みたいだ。

人ごみを掻き分け、掲示板が見えるところまでやって来た。

幸い、俺はそこそこ身長が高いので、ラクに見える。

クラスは8つ。その中に・・・俺とユリオウスの名前を見つけた。

「・・・？組か」

どうも同じクラスだったようだ。

確認を終え、ユリオウスのもとに戻る。

「？組だつてよ。同じクラスだ」

「そ、そうですね・・・よろしくお願いします」

ユリウスはぺこりとお辞儀した。そんなに大したことでもないと思うのだが・・・どうも下手に出やすいというか、謝りやすいというか。

「じゃ、ひとまず講堂へ行けだつとよ。入学式があるらしい」

「あ、そうですね。じゃあ、急ぎましよう」

俺とユリウスは講堂へ足を運んだ。

講堂はちよつとした劇場くらいの広さがあつたが、人の波で中はいっぱいになつていた。

これじゃ座るところもなさそうだ。

「しゃーない、立つとくか」

「そう・・・ですね」

素直にユリウスも同意してくれた。俺と2人で壁を背に立つ。

程なくして、入学式が始まつた。

校長とおぼしき青年が壇上に上る。

・・・青年？

「新入生の方々、我が王立レグナール学院へようこそ。ここは世界に幾多と存在する【迷宮】へと挑む、いわば階段。ステップアップのための礎とも言える場所となります・・・」

ありがちな演説が始まつた。どうやらあのコバルトブルーの長髪をした優男っぽい男性が校長のようだ。

つか、若すぎるだろ。かなり古い学院なのに何故。大体は威厳たつぷりの老人が校長に就任するつてのが普通だろが。

「どう見ても校長、若すぎないか？」

俺は隣のユリウスに囁く。

「ああ、ヴェルジエント校長ですか？彼は現役の冒険者で、今も世界中の迷宮を旅するお方です」

「そんなお偉いさんがなんでまた？」

「ご存知ないんですか？校長先生は10年前に学院を首席で卒業された方で、今回の校長は自分に一任してほしいと要望があつたそうです。もともと優秀な聖堂騎士シユヴァリエだつたそうなので、先生たちも納得したらしいですが」

「ふーん」

また熱心なOBだな、そりゃ。

俺だつたら頼まれても拒否するね。

「じゃ、あの校長20歳後半くらいか？」

「はい、確か27歳でしたかね。世界最年少の校長だとかずいぶん若い校長も居たもんだ。違う意味で有名になりそうだな。」

入学式が終わり、俺とユリウス（と、その他大勢の生徒）は教員の指示に従い、校舎の教室へと足を運んでいた。俺の席は窓際の真ん中あたり。できれば最後尾がよかったんだが、まあ妥協しよう。ちなみにユリウスは俺の前。

「それにしても、ユリウス結構詳しいな。学院のこと」

「はい。兄がここのOBだったんです。今は音信不通になってるんですけど」

「・・・なんか、すまん」

「あ、いえ。気にしないで下さい。ほとんど連絡は取れないんですが、最近私宛てに手紙が来たんです・・・。嬉しかったので父と母には内緒にしています」

「ふーん・・・兄ちゃんのこと、好き？」

「・・・っ。そ、それは・・・好きですよ、兄妹としては。憧れてます」

「そっか・・・俺もさ、姉貴がいるんだ。次男次女だな、俺たち」

「くすっ。そうですねっ」

ユリウスは少し微笑んでくれた。その顔に俺は・・・

本当の平和ってのは こういう無垢な笑顔になれることを言うんじゃないか・・・

そう、つくづく感じた。

3時限目 チャラ男と美少女と罵り

学校内部の説明も終わり、俺たちは元の？年？組の教室に戻された。まあ、説明と言っても、視聴覚室^{モニタールーム}で学校の構造を見せられただけなのだが。

「面白かったですね」

・・・何故かユリウスが『ほにゃあ』とでも音をつけられそうな顔をしていた。

いわゆるトリップ状態。

「そうかあ？ただの学校案内だろ、あんなの」

「うーん、それはそうなんですけど・・・こう、なんて言うのかな・・・」

ユリウスは手振りを加え俺に説明しようとするが、さっぱり分からん。よけい解読不能に陥っている。

「ま、まあ・・・楽しかったならいい」

「はい」

ユリウスはしばし別世界へダイブし、5分後にこっちへ戻ってきた。

「・・・はっ、私は何を・・・」

「・・・お帰り」

「す、すみません・・・取り乱しました」

そうでもないが。むしろ今までよりも落ち着いていたぞ、今。

この状態は今後「ユリトリップ」と呼ばせてもらおう。

それではこれより『ファーストギルド』の結成をしてもらう。全員、エントランスホールに集合せよ

教室のスピーカーからアナウンスが流れた。
ギルド結成か。どんな奴と組むことになるのだろうか。

ここで1つ、補足しておこう。

王立レグナール学院に通う冒険者は必ず『ギルド』と呼ばれるものに所属する必要がある。

ギルドとはつまり、学徒同士で組むチームのようなものだ。

メンバーは最低2人。多くて6〜8人くらいになる。メンバーの入れ替えはいつでも可能だが、その権限を持つのはギルドのリーダーに選ばれた人間のみである。

ちなみに『ファーストギルド』とはいちばん最初に組んだギルドである。セカンド、サードとつながっていく。

まあそんな『ギルド』を組むため、俺とユリウス（と、その他生徒）はエントランスホールに集合していた。

ホールはちょっとしたレストランのように円テーブルとイスが用意されている。

ここからは自由行動。つまり、好きな奴とギルドを組むための時間が与えられる。

「さて、誰と組んだものかな・・・ユリウスは俺と同じギルドで既に決定済みだし」

「ええっ!？」

「嫌か？ 俺とでは」

「いえ、そういう訳では・・・」

「じゃ、決定な」

「あ、はい・・・」

まんざらでもなさそうなので、俺はユリウスと近くのテーブルにすわる。

・・・ちなみにキチンとテーブルのイスに座ったのであしか

らず。

「……………さて」

どうしたものか。

俺は見知らぬ相手に『やあ』と話しかけられるほどフランクな人間じゃない。

と、そこでふとユリウスを見る。

「……………」

「……………な、なんでしよう?」

「いや、別に」

考えてみれば、コイツには普通に話しかけたんだっただな。

まあ、事情が事情だっただけなのだが。

しかし、このままでは確実にヤバイ。いくら何でも剣術士と^{ソイドマン}医師^{メディック}だけのコンビギルドなんて前代未聞である。そんな恥ずかしい真似だけはまっぴらごめんだ。

そんなことを考えていると、テーブルの少し前を同じ年くらいの男女が通りかかった。

「……………だからあ、あれはちよつとしたミスだったんだっ
て〜」

「そのちよつとしたミスで、私まで恥をかいたのよ！ 少しは責任を感じて」

「おいおいー。たかが入ったクラスが隣だっただけでそこまで怒るなよ。掲示板を見間違えただけじゃんか〜」

「た・か・が？ あなた、全っ然反省してないでしょ!」

「うつ。そ、そんなことないぜ〜」

なんか、もめてるみたいだ。

見る限り、あのチャラ男が隣のクール系美少女に何かしたらしい。なんというか、どこことなく微笑ましい光景だ。

「なら、それを行動で示して。そうね……駅前のショートケーキを1箱」

「ぐっ……わざわざ高いもんを……」

「な・に・か？」

「いーえいーえ!!」

完全に尻に敷かれてるよなあ、アレ。

……この際、あの2人でもいいか。

チャラ男はともかくあの娘はまともそうだ。

「あいつら、どうだろう」と、ユリウスに聞くと、

「いいんじゃないでしょうか」と、素直に受け入れてくれた。素っ気無いが、興味ないのだろうか。

「おい、そのバカカップル」

「ちよ……!!」

「「だれがバカカップル(です)かあああああ!!」」

はい、盛大に罵倒されました。

ファーストコンタクト、華麗に失敗。

4時限目 ファーストギルド「フリューゲル」

さて、その後。

「いや、すまん。ついノリで」

「はっはっは、いいってことよ！」

チャラ男は俺の背中をバシツと叩いた。

つか、ちよつと痛い。やっぱ根に持ってないか？

「さつきは悪かったわね。はしたない所を見せちゃって・・・」

「い、いえ。そんなことは・・・」

女子サイドはそこそ落着いている。ウマが合っているのか、そうでないのが微妙だが。

さてそろそろ本題に入らなければ。

「さて、駄弁りはここまでだ。2人はまだギルド組んでないだろ？」

「おう。一応、このレイテと組むことは決定してるが」

「甚だ不本意ではあるけど・・・と、申し遅れたわね。私はレ

イテ・バージエス。レイテで構わないわ」

「ども。俺はフェイン・ウイードリット」

「ユ、ユリウス・ネウロードです」

レイテと名乗る美少女は軽く会釈した。こちらも条件反射で軽く頭を下げる。

「フェインにユリウスね、よろしく。で、こっちの、頭に脳みその代わりに濃厚なスイカが詰まっているダメ人間がヴィクター・ライオネル。一応、幼馴染よ」

「おう、よろしくな・・・ってコルア、レイテえ！だあれが頭にスイカが詰まってるだとお！？」

「あら、掲示板を見間違え、それに知られて間違ったクラスに逝くほどの人間よ？ 脳みそが詰まっているとしたら、それはもう奇跡としか言い表し方が無いわね」

「一部字が違うし、そこまで言われるいわれはねえよ、このドS魔^{フリ}」

術師がツツ!!」

「……死にたいよね、この馬鹿力しか能がない単細胞格闘家」

なんか、口論が始まった。どうやらあの美少女は容姿端麗だが、性格に難ありそつだ。

そついう意味ではユリウスの方が安心と言える。

……つて、ちよつと待て。

「お前ら、格闘家と魔術師なのか？」

「ん？ ああ、そのつもりだが？」

これはまたとない機会ではないか？

もともと迎えいれるつもりだったが、これだけのスキルがあるなら安心できる。

「丁度いい。お前たち、俺たちのギルドに入らないか？ と言つても、まだ俺たちも2人なんだ」

「おう、いいぜ！ 仲間は多い方が楽しいし、なっ」

「まあ、いいわ。私も馬鹿だけとコンビなんてまっぴらだから。これからよろしく」

「よ、よろしくお願ひします……」

「ああ」

「……つて、さっきからレイテは俺のことを馬鹿呼ばわりしすぎだああ!!」

「五月蠅い」

「ゴメンナサイ」

あっさり敗北。テンションの上げ下げが不安定な奴だ。

・・・そこで俺は大事なことを思い出した。

「あ、ギルドの名前」

ギルドが決まれば、近くの受け付け嬢にギルド申請を行わなければならない仕組みだ。

その際、用紙に【氏名^{ネーム}】、【年齢^{エイジ}】、【職業^{ジョブ}】

そして【ギルド名】を書きこまなくてはいけないことになっている。

「そうね。早々に決めないといけないわ」

「んじゃ、ファイターズで！」

「「「却下」」」

「満場一致、さらに即答は酷くね!?!」

「王道^{ベタ}すぎる。もう少し凝ったものの方がインパクト強いだろ」

「では、ハーメルンなど・・・」

珍しくユリウスが口を開いた。

危うく、影が薄くなりかねんな、コイツの現状。

言論の自由は奪われてないから、もっと積極性持っていいよ。

「ん、悪くはないが・・・なんかメルヘンチックだな」

「そ、そうですか・・・」

「あ、いや、悪いわけじゃないぞ?」

「どっちなのよ・・・じゃあフェインは何かあるの?」

「う、そうだな・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・!
！！

長く考えた末、ある名前が思いついた。

「【フリーゲル】・・・って、どうだ?」

「「「フリーゲル?」」」

全員がキョトンとしている。

そうか、これは地元の言葉だったな。

「俺の地元で【翼を持つ者】って意味だ。『未来への羽ばたき』とか『大空の偉大さ』みたいなものを象徴して取り入れてみたんだが……」

「……いいですね。それ、すごくいいです！」

長い沈黙の後、ユリウスが笑顔で答えた。

「ああ。なんかこう……ロマンがあるな！！これからのギルドにはピッタシの名前だ！」

「ええ。それでいいんじゃないかしら」

俺の意見に満場一致してくれた。

というわけで、近くの受け付けカウンターへ足を運ぶ。

「ギルドの申請、お願いします」

「はい。ではこちらの用紙に記入して下さい」

受け付け嬢から用紙を受け取り、記入する。そして、手渡した。

「はい、確認しました。ギルド申請完了です」

「ありがとうございます」

「今後、半年はこのギルドメンバーから変更は出来ませんので、ご了承ください」

いろいろ説明を聞いて、元のテーブルに戻る。んで、説明を皆にも話した。

「分かりました」

「それじゃ、よろしく頼むぜリーダー」

「頼りにしてるわ」

「ああ。任せておけ」

こうして俺たちのファーストギルド「フリーユージェル」が誕生した。

それでは、これより入学試験を行う。全員、Aホールに集合せよ。繰り返す……

アナウンスが鳴り響く。

そして俺は関節をコキコキと鳴らした。

さて、初の実践と行こうか。

4時限目 ファーストギルド「フリーユージェル」(後書き)

はい、ようやく主要メンバーが登場しました。

おっと、事故照会・・・ゴホン、自己紹介が遅れました。

ふじみやまたが
藤宮雅隆と言います。

学園バトルモノは初めての執筆となりますが、精いっぱい頑張ります！

さて、次回はようやく戦闘です。

期待してお待ちください！ でわでわ

5 時限目 入学試験という名の『試練』（前書き）

さて、初バトルです。

といっても、バトルシーンは結構少なめなんですけどねw

そのあたりも含め「おkだZE!」と仰る、心が瀬戸内海くらい広い方はご覧下さい。

では、ごっご。

5 時限目 入学試験という名の『試練』

さて、たった今結成されたギルド「フリーユージェル」の面々（とエトセトラ）は、

【Aホール】と呼ばれる試験場つばい所へ召集された。アナウンスによると、今から入学試験があるらしい。

といっても、くどいようだがココは【冒険者育成機関】。普通とはかなり違う点がある。

まあココも、腐っても学院。さすがに致死レベルのものはないが、半殺しならぬ【半死に】に至ることも無くはない。

「だ、大丈夫でしょうか……」

「まあ、命の危険は保障されてるから、一応大丈夫だとは思うが」

「とはいえ、生半可なものではないでしょうね……」

「……いつ馬鹿は脱落するかしら」

「今ちよつと不穏な発言漏らしませんでしたかねえ、バージエスさあん！？ 俺、一応アンタらの味方だかね！？」

あー黙れー。せーしゅくにーつと……

ワイワイと騒がしいホールに響いた拡声器の声で俺たちは一瞬で静まり返った。

んーと、ではこれから入学試験を開始するー……あ、そうだ。新入生の皆さん、始めまして。魔術^{マジカリー}学科の担当教諭を勤めている、ガリオン・バンチエッタだ。よろしくー

見た目も声もダラけた男性がちょっと高いところから話す。
ダボダボの作業着に、煤^{すす}けた白衣を着ている。目にはクマがあり、
薄緑の髪は寝グセのようにボサボサである。
異端な学院には、異端な教師あり。つてか・・・？

えー、それじゃー、まあ、その辺にテキトーにあるゲートに入っ
てもらえるかな。ギルド順にね

ホールを見渡すと、なるほど、壁にちらほらエレベーターのような
ゲートがある。

俺たちも1つのゲートの列に並び、順番を待つ。

「あのセンサー、どう思う？」

後ろに立つバカ、もといヴィクターが話しかけてきた。

「さっきのか？ まあ、こんな学院だ。あんな教師の1人2人、い
てもおかしくはねエだろう」

「そんなもんかね・・・」

「それに、中身は優秀かもしれない。上辺で判断するのはあまりよ
ろしくない」

「それもそだな。うっし、分かった!」

そうこうしてるうちに、俺たちまで順番が回ってきた。

俺、ヴィクター、ユリウス、レイテの順に入ると、突然ゲートの中
が白い光に包まれ始めた。

それはもう、目も開けていられないほどで・・・

シュンッ!!

「・・・??」

「ここは・・・？」

気がつく俺たちは、真っ白な部屋にいた。壁と天井の他には何も無い。上下左右、白・白・白のオンパレード状態である。

まるで、大きな画用紙の上にいるような感覚だ。

「少し、目に痛いわね・・・」と、レイテが目をこする。

確かにこの部屋じゃ、電気を消しても明るそうだ。病室か研究室はいつもこんな感じなのだろうか。

はい。んと、それじゃ、入学試験スタート。とりあえず道なりに進んでゴールまで行くつてのがルールです。制限時間は15分。タイムアウトや失格になっても、内申点とかには影響しないんで、軽い気持ちで頑張ってください。では、ゴール地点で待ってます・・・

どこからか、あのダラケ教師の声が響く。と同時に ブーーーーッ というブザーが鳴り響いた。

「ゲーム・スタートだな」

「おっしゃ！ 燃えてきたぜ！！」

「足だけは引つ張らないことね、ヴィック」

「が、頑張ります・・・」

と、突然『ガコンツ』という音が部屋の床からした。

よく見ると、鉄の取っ手が床の中央からせり出している。

「引いてみるか」

取っ手に手をかけ、上に引いて見る。

と、『ガコンツ』という鈍い音と共に、四角い穴が見えた。中は暗く、底はここからでは見えにくいのが、一応ハシゴが掛けられていた。

「行け、ってことだろうな」

「どうするよ？」

「そうだな・・・ヴィクターを先陣に、俺、ユリウス、しんがり
レイテの順に行こう」

「分かりました」「ええ」

俺たちは薄暗い穴の中を降りていく。

除々に下の様子が見えてきた。

「よっと」

ハシゴから降りて、あたりを見渡す。どうやら長い通路のようだ。
地下鉄を想像してもらうと、わかりやすい。

「・・・ん」

ふと、壁に『』の紙が壁に貼ってある。あからさまに怪しいが、
逆方向は落石でもあったように行き止まりである。

「行くか」「おう」

俺たちは道なりに進んでいく。長い長い通路を。

歩き始めて10分。さすがに怪しいと勘ぐり始めた。

「おかしくないか？ 何も起きないぜ」

ヴィクターも俺と同じことを思っていたらしく、その場の長い沈黙
を破った。

「確かにそうね。そろそろ何か動きが・・・！！」

と、その時レイテが表情を鋭くしたのを、俺は見逃さなかった。

「どうした、レイテ」

「来るわ」

「来るって・・・？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
コロコロ・・・・・・・・・・・・・・・・

「何の音……つてええ!!?」
俺が振動音に振り返るとそこには、

巨大な鉄の球体が俺たちを潰そうと転がってきた。

「わーーーーーっ!!」

「走りなさい!」

レイテの叫びに俺は、

「悪いユリウス!」

「きゃ!」

ユリウスをお姫様抱っこして、一目散に走った。レイテ、ヴィクタも潰されまいと必死である。

「……私もいつか、されてみたいわね」

「その気ならば、いつかしてやんよ」

「遠慮するわ、バカが感染る」

「こんな時でも激しくサドですねえ、アンタは!」

そうこう言っただけで走っているうちに、通路に横穴があるのを見つけた。

「あそこに飛び込めえ!」

「おう!」「えええ!」

ズザアアアアア!

ゴロゴロゴロゴロゴロゴ……

俺たちは横穴に飛び込み、球体の脅威から逃れた。

「ふう、危機いっぱい……つつ!?!」

ホッとしたのもつかの間、床が急に坂になり、俺たち4人は滑り降りた。

するとそこには、何10体という甲冑の剣士たちが待っていた。

「何だ・・・コイツら・・・」

パンパカパーン。ボーナスステージに突入した皆さん。あなたがたはこれから、剣士たちとバトルをさせてあげましょう！ 全滅させる、または10分間逃げることができたなら、内申点にいくつかプラスさせることを約束します<<

あのダルそげな教師の声だ。

「待あて、さつき『内申点とかには影響しない』つってなかったか？」

それはそれ、これはこれ。ま、死ぬようなことはないだろうから、せいぜい頑張つてちよ<<そこで声は途切れた。

「・・・チ。仕方ない、やるか」

「ああ。ユリウス、援護は任せる」

「はい！ 精一杯、頑張ります！」

「頼もしいわね医師さん。頼りにしてるわ」

「行くぞ！！」

俺は背中の長剣を引き抜き、甲冑の剣士に斬りかかった。

「てええいつ！！」

ガイインツ！！

鎧は欠けることもなく、逆にこつちが折れてしまいそうである。

「ツチ、剣じゃ分が悪い・・・つとお！」

なんとか、甲冑剣士の上段斬りを躲す。その瞬間から勝つための方法を模索する。

考える、甲冑剣士の構造と弱点を。考える・・・

「・・・イチかバチか・・・」

俺は近くに転がっている鉄槌を持ち上げるが、相当重い。だが、そんなことに構っている余裕はない。

「うおおおらあっ!!！」

力いっぱい、筋肉が切れてもかまわないというぐらいに鉄槌をブン回した。

ガツシャアアーン!

鉄槌は俺の手を離れ、空中をさ迷う。そして、俺の目に映ったのは・

・

「何・・・?」

何も入っていない、甲冑の下半身だけだった。

5時限目 入学試験という名の『試験』（後書き）

はい。ちょっと引っ張ってみました。

というか、全部書ききるには長すぎたので、2部構成にしたいと思
います。

使い古されたネタが多いかもしれませんが、なにとぞご了承ください
え。

6 時限目 サバイバル試験、その結末（前書き）

はい、後半戦です。

ありがちなオチですが、許してください。

それでは。

6 時限目 サバイバル試験、その結末

甲冑の中身に驚愕しているヒマも与えず、剣士の上半身は空を飛び、下半身と再び連結した。

「どうなってるんだ、コイツぁ・・・」

仕組みがますます分からなくなってきた。分かるのは、「コイツは人為的な『何か』によって動いている」ことぐらいだ。

「ヴィクター！ コイツの中身は空っぽだ！」

「ああ、俺もさつき気づいた！ どうするよ!？」

対処法がまるで思いつかない。無人の剣士とどうやって戦えばいいのか。

「なら・・・動けなくするのがてっとり早いわね」

「「え?」」

俺とユリウスが共に聞き返すと「そうだった」とヴィクターが落ちて着いた声で表情を明るくする。

「レイテには、誰にも負けない切り札ジョーカーがあったな」

「切り札?」

「レイテの家系、バージェス一派は超一流の魔術の一族。レイテはその中でもかなりの実力派だ」

「そうか！ 攻撃して勝てないなら・・・!」

「その通り。さて、いくわよ・・・」

レイテは懐から帳面のようなものを取り出し、1枚を破って口に啜えると「パンッ」と1つ、手拍子を打った。

そして、唱える。

す。

「ハツ、ハツ、ハツ・・・」

走っていくと、通路が横に曲がっている。

潰されまいと、俺たちは滑るように横に曲がった。

と、曲がった先は広い部屋だった。

ご苦労、諸君。最後の試練に到達したようね

またどこからか声がする。しかし、あのダル教師（名前なんだっけ）の声ではない。

挨拶が遅れたわね。私はルシファリオン・マリンベール。長いからルーシイでいいわ。あなたたちの上を見てみなさい

「上?」

言われて見上げると、そこにはガラス張りされた部屋に1人の女性
が立っていた。

ノーマルグリーンのロングコートに身を纏い、丸メガネをかけた姿は、まるで教師というより教官の雰囲気をかもし出している。

あなた達にはこれから最後の試練に挑戦してもらおうよ

と、ルーシイ先生はパチンと指を鳴らす。

すると今さつき通った通路の扉が閉まり、やや上から水が流れこんできた。

それも冗談では済まない量と勢いで。

ベタだけど、水攻めの試練よ。その勢いなら、あと10分もせず
に満杯になるわ。早く助からないと、全員溺れ死んじやうわよ?
ルーシイ先生は小悪魔ような笑みを浮かべ、その場に立っている。

「やべえぜ、もう膝まで浸かってきたぞ!」

「心配無用・・・まだ策はある!」

俺は、右手を上に向けとっておきの【秘密兵器】を発動させた。

バシユツ!!!

俺は手首からワイヤーを発射させ、天井の上のパイプに巻きつけた。

「レイテ、俺につかまれ」

「え！？ う、うん分かった」

レイテは俺の服のすそをちよんつと掴む………っ、

「それじゃ落ちるから、もっとこう……抱きつく感じで！」

「え……あ、はいっ！」

おいおい、タメ口のレイテから『はい』って。

まあそんなことを気にする余裕はなく、俺にしがみつくレイテはギョツと目を閉じている。

「落ちるなよ……いくぞ！」

俺はワイヤーをリールの要領で巻きつけ、ガラスの前にまで上った。そして、振り子のように反動をつけ、向かい側の壁を蹴り、
「いっけええっ！」

ガッシャアアアン！！

ガラスを蹴破り、部屋に転がり入った。

「つつつ……レイテ、無事か？」

「ええ……なんとか。無茶するわね、意外と」

「まあな、つと……」

俺はガラスの割れた穴からワイヤーを下に垂らす。

「これでいいだろ、溺れるまえに上がって来ーい」

「おう！ さてシリウスちゃん、行こうか」

「『ユ』リウスです！ 私、いつから天界の精霊になったんですか……」

おお、ユリウスが珍しくツツコミにまわった。

2人は順にワイヤーを上ってきた。ちなみにこのワイヤーは手の皮膚を切ったりはしないようになってる。どういうもんかはウチの科学者に聞いてほしい。

「よし、これで全員集合だな」

「・・・そういえば、あの先生は？」

おめでとう、諸君。最終試験クリアよ。まさかワイヤーを使うとは思っていなかったけどね

また、天の声が出た。どうやらさっきの姿は幻影ホログラムだったらしい。

その部屋にあるゲートから、もとのAホールに出られるわ。お疲れ様

そして、また声は途切れた。

『姿なき先導者』・・・か。

シユンツ！！

俺たちはゲートをくぐり(?)もとのホールへ戻ってきた。

「んーっ、どつと疲れたー」と、ヴィクターが体をグツとほぐす。見るとホールには少数ではあるが、他のギルドも帰ってきていた。早いほうなのか、遅いほうなのかイマイチ分かりづらい。

だが、他のやつらも猛者であることは間違いない。目を見ればわかる。

「・・・」

「どうしたんですか？」

「いや、別に・・・」

ユリウスが気遣ってか、ちょっと話しかけてきた。余計な心配させてしまっただろうか。

30分ほどして、他のギルドも続々と帰ってきて、またホールは騒がしくなってきた。

よっし、これで全部そろったな。みんな今日はお疲れさん。今回

はこれにて解散にするから、みんなとりあえず寮に荷物とかを入れて行ってねー。それじゃ

ダル教師（名前なんだっけ）が壇上で促す。

そうだ。今度、名前聞いところ。いつまでも「ダル教師」と呼ぶわけにはいかんからな。

俺たちは他の奴らと共に、寮の方へ向かった。

7時限目 男女4人、屋根は1つ？（前書き）

今回、いつもより少し短いです。

まあ、バトルもない日常パートだからいつか。

では、どうぞ。

7時限目 男女4人、屋根は1つ？

試験も終わり、俺たちは寮のほうへ案内された。

ちなみに、寮は校舎と別の建物で、3階建て。1年が1階、2年3年と上へ上がる感じだ。

よっぽどのがない限り、他の学年の階へ行くことはないらしい。まあ、俺もあまり興味がないんで別にいいのだが……

「あーあ。高いところからの絶景が見たかったのによー」

この男だけは違った。ヴィクターはやはりそういうタイプの人間らしい。俺と正反対だ。

「苦労してんな、お前も」

「なんなら代わってみる？」

「謹んでご遠慮させていただきます」

「そう、残念」

奴のお守りができるのはレイテくらいだろうな。ある意味コイツも稀有なやつだ

そんなこんなで、自分たちの使う部屋のルームキーを渡され、俺たちは104号室の扉の前に立っている。

「いきますか」

鍵を開け、中に入る。

「お、おじゃましまーす……」

ユリウスは本当、礼儀正しい。誰もいないというのに挨拶する奴、今日こんにちそうそういない。

天然記念物に指定してやりたい。

「けっこう広いなー。お、列車だ」

ヴィクターがベランダに出て、景色を一望している。窓越しに俺も

見ると、なるほど、なかなかの絶景が見られる。

学院の向こうには、緑生い茂る平原が広がっており、その向こうには気高きベルニード山脈がそびえ経っている。

平原を跨ぐ鉄道からは、俺たちが朝乗ってきた列車が街へ向かってひた走っている。

「ベットルームは2つね。ユリと私、フェインとヴィックでいいわね？」

「問題ない」

「は、はい。ところで、レイテさん」

「ん？」

「その・・・ユリって私のことですよ」

「ああ、そのこと。私、親しみが持てる相手にはあだ名をつけるのよ。ユリウスだからユリ」

「はあ・・・」

どうやらレイテも、ただのクール才女というわけでもないらしい。ちょっと安心した。

小1時間ほどして、俺たちは自分の荷物を部屋に置き、マイルームを形成した。

「よっし、終わりっ」

「こつちも終わったわよー」

再びリビングに集合する。

キーン・・・コオン・・・

と、そこでどこからか鐘が鳴った。

「夕食の時間みたいね」

俺もその言葉で柱時計を見ると、もう6時を過ぎていた。

「食堂に行くぞ」

「あいよ」

寮から食堂へと赴くと、そこはもうバイキングのようになっていた。いや、バイキングそのものだな。

めちやくちや横に長い机に生徒がギッシリ並んで、食うわ食うわ。カウンターにも、1日で用意できるレベルを超えた料理が並んでいる。

「うつひよー!! 太っ腹だぜえ!!」

派手好き格闘家は、言うが早いか、トレイを引ったくりカウンターへと走っていった。

「・・・今度アイツに『落ち着く』の4文字を頭蓋骨に叩き込んでやってくれ」

「知り合って10年以上経つ今でも、無理だと思っわそれ」

「・・・」

最近感じてきたが、ユリウスって影が薄くなりつつあるな・・・心配だ。

食事も適当に済ませ、部屋に設置してあるバスルームで身体を清め、そろそろ就寝の時間になった。

「うえつぶ、苦しい・・・」

「あれだけがつついて食べばそうなるわ、アホ」

「フエイン、結構お前も物言いキツイ・・・ぞ・・・」

ヴィクターはあれから計15食ほど食べつくし、腹が風船のようになつて寮へ戻ってきた。

それはもう、目を背けたくなるほどの出っ張り様だな。

「さて、終身の時間よ馬鹿」

「さらつと俺の人生終わらせないでくれませんか!」

「んじゃ寝るか・・・ふわぁ」

「そうですね・・・おやすみなさいです・・・」

「ええ、おやすみ・・・」

7 時限目 男女4人、屋根は1つ？（後書き）

はい、終わりです。

迷宮入りは、もうすぐです！

つか、いつになったら入るのそっちに……？

作者が聞きたいよお……（泣）

8 時限目 己の度量、他人の信頼

朝日が顔を出し、広大な大陸に目覚めの光をもたらす。

俺たちが冒険者の卵になったところで、結局、地球の自転速度が速まるわけでもない。

そんな些細なことで世界が目まぐるしく動いていたら、地球はバテてしまうだろう。

ただ、自分の眼から世界が変わって見えることはあるかもしれない。人生の主人公はいつだって自分なのだから。

「おつす、フエイン」

「お早う。つーか遅いぞ」

「いいじゃん、俺の授業、3限からだし」

ここ冒険者育成機関では、授業選択ができるようになっていた。

大まかには【剣術学】 【魔術学】 【格闘学】 【探索学】と分

かれており、そこからさらに細かい授業へ派生していくようになる。

【剣術学】の【実技科】、【探索学】の【識別科】のようにな。尚、

どんな職業シユブに就いていようと、全授業を選択できる。

『全ての知識に、貪欲であれ』がこの学院の校訓であるらしい。『

らしい』ってのは、つい最近、レイテから教えてもらったからだ。

それまで校訓などという知っ^ていてもあまり利用価値のないもの、興味すらなかった。

ちなみに俺は今日、1限と4限、6限を取っている。

つまりは、この脳内欠陥ブレインデメリッターの男ことヴィクターは、この10時16分という、太陽がとつくに顔を出した時間まで、惰眠を貪っていたことになる。

「おい、今ちよつと失礼なこと考えたろ？」

「いえいえ滅相もない。それより今日な。ちょっと皆と話したいことがある」

「ふーん、今すぐは無理そうだが」

「みたいだな」

寮には、俺とヴィックの2人しか残っていなかった。ユリウスとレイテはおそらく授業に出ているのだろう。

寮の壁には、それぞれの時間割が貼られている。2人とも熱心なタイプだから、しっかり授業を聞いて、ノートを書いているのだろう。レイテは実験でもしているだろうか。今後の戦力として期待している分、彼女には信頼を置いている。

「じゃ、俺は次の授業の準備でもしますか」

「あと10分くらいだぞ」

「わーってるって」

書類を手に持ち、ヴィックは扉に手を掛ける。

「・・・なあ、ヴィック。お前の次の授業、何？」

「んあ？【探索学】の【移動科】だけど？」

「・・・いや、ならいいんだ。頑張って来い」

「お、おう」

ガチャ、バタム。

アイツが書類を持つてると、なんかこう、シユールだったので呼び止めてしまった。

・・・そりゃ、格闘家^{モンク}だって、真面目に勉強くらいするわな。最近の俺は何気に人を見下す癖がある。早々に改善しなければ。まあ、アイツは微妙に信頼していないのもまた事実だが。

「ふッ!!」

キンッ! キイン!!

学内闘技場に金属音が響く。

今日、俺の出る4時限目は、【剣術学】の【実践科】である。

【実技科】と【実践科】は、似ているようでちよつと違う。

【実技科】は単独で自己練習、【実践科】は学徒同士での模擬戦である。統一してもいいのではないか、とは思うのだが、新入生とはいえ多少は腕に差があるものだから、まずは人形相手に自信をつけるのが先決なのだそうだ。

まあ、本当に迷宮に入れば、シュミレーション通りにいくものではないのだが。

「くっッ!!」

さて、俺は今日の前の同級生と模擬戦を繰り返している。相手は俺と同じくらいの身長で、やや童顔の少年である。髪は栗色で、ややおとなしめの空気を纏っている。表情にはあまり余裕がない。

「ほッ、はッ!!」

対して俺はというと、昔とった杵柄というやつでヒョイヒョイと攻撃を交わしつつ剣を突く。

あんまりダラダラやるのも性分じゃないので、ここらで決めさせてもらいますか。

「あらよつと!」

ギインッ!!

俺は真一文字に剣を薙ぎ、相手の刀剣を切り裂いた。

「……ま、参った」

相手の少年は、自分の剣が切られたことを知ると腰を抜き、尻餅をついた。

周りにいた同級生たちも、今の動作に固まって、こちらを見ている。それは、明らかに尊敬の眼差しではない。

悪目立ちしすぎたか……？

「ちよつとそこの君」

今の模擬戦を見た一人の女教師が俺に近寄ってきた。ヤバい予感がする……。

「すまないが、少し一緒に来てもらえるかな？」

「は、はあ……」

俺は言われるがまま、彼女の後について行った。

「……入って」

連れて来られたのは、1つの書斎だった。

赤い絨毯が床一面に敷かれ、壁には本棚がギッシリ詰まっている。

彼女が「パチンツ」と指を鳴らすと本棚の上にある燭台に火が灯った。

この女教師、剣術も魔術も一流のようだ。杖もなしに魔法を使うのは、並の魔術師ではそうそう簡単にはいかない。

「君、さっきのアレ、どうやったの？」

「先生なら一応分かるとは思いますが、説明しましょう。」

刀剣つてのは、どんなに製鋼に造ったとしても、ある程度強度が弱まっている場所というのが必ずあります。その一点に力を集中させ、一気に振り下ろせば簡単に切れます。

力ではなく、技術の問題ですね」

「おみごと。でも実際それが成功するなんて・・・生徒じゃ滅多にいないのよ」

女教師は目を丸くしている。

確かにこの剣技「鉄崩し」^{てつぐず}は理屈だけでどうこうできるものではない。

弱点を瞬時に見極める判断力と動体視力。そして、目標の位置がブレる前に攻撃する技量がなければまず成功しない。恐らく、これが可能なのは？年の学徒じゃ2、3人くらいだろう。

「ねえ君・・・よければこんなのに参加してみない？」

そういつて女教師は一枚の紙を手渡した。

「・・・グラディエイト・チャンピオンズリーグ？」

「そう。年に一度、学徒同士で己の武器を使ってリーグ戦を行うのよ。優勝すればそこそこ賞金も出るし、卒業後の進路にも有利になるわよ。どう？出てみる気ないかしら？」

なるほど。要するにこの女教師はコイツに俺を参加させたかったわけだ。

「別に出場するのは構いませんが・・・どうして俺を？」

「決まってるじゃない。？年がこの大会に出るなんて前代未聞のことなのよ？誰かが優勝してくれば、学年主任としての地位は鰻登りよ！！アーツハツハツハ！！」

「ああ・・・なるほど・・・」

つまりこの人は俺をダシにして、自分の立場は良い方向へ向かわせようって魂胆か。

「・・・分かりました。詳しい話はまた今度つてことで」

「うんうん、物分りがいい子、アタシ好きよ」

「失礼します」

ガチャ、バタム

俺は書斎を後にした後で、大事なことを思い出した。

「……………あの人の名前、何だっけ……………？まあ、いつか」

一つの終焉

現実には、不可能はあるか。

答えはイエスだ。

この世には、どんなに力を張ったところで、
どれだけ、血の涙を流したところで、

正義が必ずまかり通ることは、決して無い。

仮にそれがまかり通ったとして、それは一握りのものだ。

俺は、弱い人間だ。

臆病で、自堕落で、悪人で、弱虫。

そんな人間が、力の大きさに関わらず、ある1つのものを掴んだと
したら？

それが、大切な人を救えるのであれば？

本当の正義なんて、誰にも分からない。分かる、はずがない。

そう。

だからこそ、人は自分で、自分なりの答えを見つけ出さなければなら
ない。

それが、人の生きる意味である。

「ふあああ……ん、フエイン、何書いてんだ？」

「ん、何、日記だよ」

「へえ、お前日記とかつけるんだ。ちょっと見せてくれよ」

「駄目だ。さすがにこれは見せられん。プライバシーに関わる」

「ちえ。まあいいけどよ」

「それより、明日はちょっと大事な話がある」

「ああ？今日じゃ駄目なのか？」

「今日はもう遅い。消灯時刻には寝る奴がウチにはいるからな」

「はは、納得。んじゃ明日な」

「ああ、おやすみ」

物語に必要な役者も、舞台も、脚本も揃った。

長すぎるプロローグは終わりだ。

物語は、今、幕を明ける。

開幕前？

見つめるのは、茨の姫。

「つまらないわねえ、もうお終いななの？」

「う、うわああああ！！！！！！」

ある迷宮に、4人の少年少女がいた。

全員、それなりの武装をしていた跡がある。

跡がある、というのは、別に変な表現ではない。

「ほらほらあ、逃げてくれなきゃ、楽しめないよお？」

「た、助けてくれ！俺にはもう戦闘意思はない！降参だ！！」

なぜならその4人は全員、武装をことごとく破壊されてしまっているのだ。

彼女の操る、無数の茨の鞭によって。

「あらそう。じゃあ・・・お終いなね」

そして、4人の中で唯一、地に足のつく剣士は、全く攻撃をものともしない少女に畏怖の感情のみを抱いていた。

そして、

「ひッッ・・・ヒイイイイイイーッ・・・！！！！！！」

その少年の喉笛は、茨の槍によって貫かれた。

そう。

迷宮に無数に伸びる茨によって全身が絡みついた少女によって。

「ふう………今度のも、あまり楽しめなかったわね。
クス………次は誰が来るかしら。私を楽しませてくれるかしら。

私を……優越感に浸らせてくれるのは………誰？」

少女は、誰とも無く、それを問う。

ただ、孤独に。

9 時限目 課外授業、茨の迷宮へ

「なあ、聞いたかよ？」

「何を？」

俺ことフェイン・ウイードリットは隣に座る同級生、レイリー・グ
ラットに声をかけられた。

コイツは俺と同じ剣術学を学んでいるのだが、本職は槍術士といランスロケット
う変わり者である。基本的にはサバサバした性格のようだ。

それなりに通ずるところがあるので、ギルドメンバー以外では今の
ところ、数少ない友人の1人にあたる。

「何ってお前、茨の迷宮の噂だよ」

「なんだそりゃ」

「知らねーのか？ ここから列車で20分くらいのところにある茨
に包まれた迷宮があるんだが・・・」

レイリーはその後、授業中にも関わらず、俺にその噂を話した。

正直言つて、無駄話しながらノートを取る、というのはけっこう難
しい。

結果、最後まで書ききることはできなかったが、同じ授業を受けた
同級生に貸してもらい、なんとか書き終えることができた。はた迷
惑というか、なんとというか。

事実、授業で書かれる黒板の文章は、思った以上に綿密なのだ。

しっかり書き込んで勉強しないと、後々大変なことになるのは、初
めて授業を受けてすぐに気づいた。

それで、その噂というのが、

茨の迷宮には、所狭しと茨が絡みついた迷宮となっており、別名を
「新緑の迷宮」。

そこに踏み入った者は多いが、帰って来る者は最下層へ行った者ほ

ど少ないらしい。

そのため、「呪われた迷宮」とか「帰らずの迷宮」とかいう異名すらついているそうだ。

俺は、どうせまたくだらないオカルト話だろうと高を括っていた。

迷宮の多いこの土地には、そういった御伽話は星の数ほどある。恐ろしい化物が棲んでいるとか、様々な罫が待っているとか。

俺もそうだった話を聞いて育った者なので、たいして気にもしていなかった。

だが、その後俺は、考えを改める出来事に出会った。

その日の夕方。

全ての授業が終わり、寮へ帰ろうとした時。

廊下にあった掲示板に俺は視界が留まった。

学院には個別に与えられる選択授業とは別に、「課外授業」と呼ばれるものも存在する。

まあ、大まかにはご想像のとおり、学院に依頼されている、迷宮への探索・魔物の討伐・鉱石の討伐などを生徒たちが請け負って、成功すれば成績にいくらか加算される、という仕組みだ。

その課外授業が寄せられた掲示板の中に、俺の視界を釘付けにした羊皮紙の塊があった。

掲示板にはいくつか抜き取られた痕跡も残っているのだが、その中に、完全に売れ残った、つまり誰も依頼しようとしないう依頼が残っていたのだ。

その依頼の内容は、茨の迷宮への探索を依頼するものだった。

どうやら、レイリーの言った噂は学園中に広まっているようだ。これを見て、俺は直感した。

面白い、と。

もともと、こんな学園、来たくもなかった。

ただ安穩と、平和な時を過ごしていたかった。

だが、人とは違うことをしてみたい、という考えも俺の中には存在した。

どっちが本物の自分かと問われれば、答えはすぐには出ないだろう。だが、こんなチャンスはあまり巡ってくることはない、と俺の中の何か、そう告げていた。

ある意味俺は、この場所では異端者イレギュラーなのだろうと、この時、確信した。

寮へと戻り、俺はある1つの話題を皆に打ち明けた。

「皆、よく聞いてくれ。俺たちは今まで、入学してから様々な技術を学んできた。」

また、幼い時から培ってきたものが我々の身体には染み付いている。だから、俺はこういう話題を持ちかける」

「なんだよ、勿体振らずに言えよ、まどろっこしい」

「でも、それなりに重要な話のようね」

「ああ、俺たちは・・・課外授業に挑む。」

内容は・・・茨の迷宮への探索。【茨の姫の真相を暴け】」

瞬間、その場の空気が凍りついた。そう、誰もが。

30秒ほどして、ようやくヴィックが口を開いた。

「おい・・・本気か？」

「俺がジョークをこんな空気で言うような人間に見えるのか？」

「それじゃ、本気である迷宮に挑むの？危険すぎやしないかしら」

「た、確かあの迷宮からは、あまり帰ってきた人がいないって・・・噂ですよな？」

ユリウスが本気で震えている。確かに彼女はこういったオカルトには弱そうだ。

だが、俺は気にせず話を続ける。

「そうだ。確かに帰還した者は少ない。俺たちが必ず帰って来られるとは、限らない。」

だが・・・それでこそ、やりがいがあるというものだろう！「ダンツ、と俺は長机を叩く。」

「誰も成功したことがないからこそ、俺たちがやるべきじゃないのか。それに、俺たちは普通の学徒以上に実力がある。魔術のエキスパート、レイテ。馬鹿力だけが取り柄だが、このギルドでは一番のパワーファイター、ヴィクター。そして、医術の名家の生まれ、ユリウス。そして・・・生まれ持った隠し玉を持つ、俺」

俺は順に彼らを指差し、最後に自分の胸を叩く。
「これだけのスキルがあつて、やってやれないことはない！そうだろう！？」

ただ気迫で押ししているだけの格好悪い姿だ。だが俺には、こうする以外に方法はない。

「・・・いいわ、やりましょう」

「だな。俺だけはスキルを褒められた感じがしないのは横にどけと

いて、やりがいがあるのは事実だな」

「わ、私でも・・・お役に立てるでしょうか・・・？」

ユリウスだけは怯え気味だ。だが、俺は彼女の肩を軽く叩いた。

「ああ。ユリウスの治癒スキルは、充分に戦力になると確信している。自分に自信を持って」

「こ、こんな私でも役に立てるといふなら・・・行きます」

ユリウスも同意してくれた。これで、俺たちの意思は決まった。

俺たちは、課外授業受付にある掲示板から、1つの羊皮紙を抜き取り、受付のおばさんに手渡した。

「課外授業、お願いします」

羊皮紙の内容を見て、おばさんも目を丸くし、こちらをみて囁いた。

「アンタたち・・・本気かい？」

「あの噂のことでしたら、気に留める必要はありません」

「そうかい・・・最近の若いモンは、命知らずだねえ・・・」

渋りながらも、羊皮紙に印をつけ、俺に手渡した。

「後は、校門の所で先生に渡せばいいよ」

言われ、俺たちは校門へと向かった。

「ん、お前たち、課外授業か・・・・・・ふむ、そうか。まあ、お前たちならやれるだろうな。頑張れ」

校門に立つ、1人の男性教師に羊皮紙を見せ、学院を後にした。

「さて、ココまで来て後悔するなよ？」

「いつでも覚悟はできてんよ」

「ええ、何をいまさら」

「行きましょう、フェインさん」

皆の言葉を背に、俺たちは列車に乗り込む。

目指すは茨の迷宮がある街、新緑の町「リーフタウンレムリタ」だ。

10時限目 見る者のいない若葉の街

電車で揺られること20分ほど。

俺たちは学院のふもとにある、緑豊かな街「レムリタ」へとやって来た。

……来たのだが……

「……だ〜れもいねーな」

ヴィックが駅に着くと開口一番、こう呟いた。

そう、誰もいない。

レムリタの街は「新緑の町」リーフタウンという名に相応しい木々が生い茂り、

心落ち着く場所だったのだが、

住人が誰一人として、屋外にいなかったのである。よって、街にはただ静寂が訪れていた。沈黙と置き換えても、そう違和感はないだろう。

しかし、

「いや、外にいないだけだ。皆、家の中に閉じこもっている」

俺はなんとなく人の気配を察知できる。耳を澄ませば、かすかに話し声なども聞こえる。

「本当ね。やはり皆、迷宮の恐ろしさに怯えているのでしょう」

レイテが口を開く。俺も恐らくはそうだろうと感じていた。

身近にそんな不帰の洞窟じみたものがあれば、誰だって寄り付きたくはない。しかし、長年住んでいるのか、そのあたりまでは不明瞭だが、簡単に立ち退くわけにはいかない何かしらの理由があって、住人はこの街に居座り続けているのだろう。

「これじゃ、どこを尋ねても迷宮のことは教えてくれそうにありませんね」

「そうだな。余計な恨みなんか買われたらたまらん。とっとと迷宮

に挑んで、イバラ姫だか何だかの真相を解いてやるうじゃねーか」
ヴィックは拳にサポーターを取り付けながら、独り言のように喋る。
「ああ。恐らく迷宮は街の奥だ。行くぞ」
俺は剣を背に構え、レイテは魔導書を腰に指し、ユリウスは医薬を
確認する。
そして、歩みを進めた。

迷宮は思ったより早く見つかった。
というか、街の奥に「立ち入り禁止」の看板が立った場所があった
のだ。

「余計バレルだろ、コレは」

「ああ、まあこれはアレだ。下手に隠したら呪われそうとか、そう
いう固定概念があったりとかするんだろ」

「そういうもんかねー・・・」

「お喋りしないで、行くわよ」

茨の迷宮は、なるほど、名に相応しく、街よりも緑が生い茂ってい
た。

ただその分、棘の多い緑なのだが。薔薇の枝がこんな感じなのだろ
うが、それにしては花など見当たらない。

「ここなら、いい野草があるかもしれません」

ユリウスが珍しくテンション上がっている。医師^{メディック}としての性分な
のだろう。なんとなく気持ちは分かる。俺やヴィックが魔物を狩っ
て快感を得るのに近いのだろう。

「なんか興が削がれるわね。こっちは緑ばかりだとこっちは和んじゃう」
「だな。出てくる魔物も、大概おとなしい奴が多いんじゃないのか
？」

ヴィックがそう言ってすぐ、俺は気づいた。

「いや、それでもないさ。なぜなら・・・」

ガササツ!!

茂みから3体ほどの魔物が現れた。身体は蔓が巻きついた形で、頭は鈴蘭のように小さく垂れ下がっている。

「こついう、原生植物が凶暴化する奴もいるからな!」

俺は背中ロングソードの長剣を引き抜き、中段に構える。

「へえ、そりやおもしろいこつて!」

ヴィックは既に腕にはめたサポーターで、俺は剣で魔物に向かい走る。

「オラアツ!」

ガスッ!

「せえいッ!」

ザシュッ!

瞬間に2体を倒すと、1体は形勢を悟ったのか、茂みの中へ逃げていった。

「あ、待て!」

「放っておけ。去るものは追うな。追っていいのは、人間だけだ」

「へえ。フェインでも、情けをかけることなんてあるのね。」

レイテが少し感心したそぶりを見せる。

「甘いか?」

「いえ、それぐらいの方が私は好きよ」

「あ、そ」

「・・・ちよつとくらい反応したっていいじゃない・・・」

「？」

「なんでもないわ。行きましょう」

なにやらレイテの頬が少し赤い感じがしたが、気のせいだろう。特に気にも留めず、先へと進んだ。

その後も、淡々と歩き続け、魔物を狩りつつ探索を進めていたのだが……。

「……あのさ、そろそろ気になること言っていいか
「ん？」

俺は先程から思っていた疑問を投げかけた。

「ここ、階段らしきものが全くないぞ
そう。」

大概、迷宮だろうと洞窟だろうと、大抵は上か下へ続く階段とか、ロープっぽいものがあるはずなのだが、ここにはそれらしきものが一切無い。まさか1階層しかないわけもないだろうし、俺たちは完全に足止めを食らったようだ。

「ふむ、奴さんやつも馬鹿ではなさそうだなあ」

「そうですね……？ アレ、なんでしようか？」

ユリウスが指差した先には、この新緑の場にはあまりにも場違いな岩があった。なんで気づかなかったんだろうか。無意識のうちに気づかないフリでもしていたのだろうか。

「こういのは……アレだな。とりあえず、破壊！！」
ボゴオツ！

ヴィックは、岩に正拳突きをかますと、見事に破壊。すると下から階段が現れた。

「ほー……」

「馬鹿の馬鹿力も、そんなに馬鹿にできないわね」

「バカバカ連呼すんじゃないやねえ！！せつかく活躍したつてのに……
「でも……事実ですよね？」

「サラツとクリティカル決めないでえユリウスちゃん！？」

本当に、サラッと呼吸するかの如く、ユリウスは痛恨のダメージを
与えた。

影薄い分、たまに発言に毒のある少女……いるよな、たまに。

11時限目 傷心の女魔導士

「コッコッ!!!」

下階層へ降りると、俺たちは絶句した。

そこには血を流し倒れている1人の女性がいた。

「……シャーリー!!!」

レイテが真っ先に駆け出す。あんなに血相変えたレイテは初めて見た。

俺も負傷した女の子のもとへ駆け寄り、手首に手を当てる。

「……大丈夫だ。まだ息はある」

「待って下さい。今、治癒魔法を……」

ユリウスが両手を傷口に翳すと、

ポウツ……

と淡い緑の光が灯る。みるみるうちに傷が癒えていく。

やはり天才的な技術の持ち主だ。魔法式起動までのスピードが速い。

「……うツ……」

うつすらと、シャーリーと呼ばれた少女が眼を開けた。どうにか意識を取り戻したようだ。

「シャーリー、気がついた？」

「レイテ、知り合いなのか」

俺が尋ねると、レイテは答えた。

「ええ。同じ魔術師プリーストで、水系統の魔法に強い……」

シャーリー、大丈夫？」

「レイテ……ええ、大丈夫……つつ……ここは……そうか、私……」

少し頭を押さえたシャーリーは、ようやく状況を飲み込み始めたようだ。

「シャーリー、この人たちは私のギルド仲間よ……ここで何があったの？話を聞かせて」

落ち着きを取り戻したシャーリーから、俺たちは話を聞かされた。

「私……仲間たちと共に、最下層まで行ったの」

「本当か!？」

ヴィックが身を乗り出す。シャーリーは少し身をちぢこませた。

そりゃこんな力馬鹿が詰め寄ったら、普通、怯えるか引くかのどっちかだな。

生憎、本人は怖がらせていることに気づいていないが。この鈍感めあいにく

「そこで私、見たの……茨の中にいる、1人の女の子」

「女の子……?」

と、少し俺は眉をひそめる。

「私たち……その子に、散々痛めつけられてね。なんとか逃げようと思ったんだけど、逃げ道が塞がれようとして……その時、リオン……仲間の1人が、私を脱出口に突き飛ばしたの」

「ギリギリで、逃がしてくれたわけね」

「急いで、誰かに伝え……いえ、言い訳はしないわ。逃げようとしたの。そうしたら……」

「疲労で意識を失った、か」

「私、どうしたら……」

それきり、シャーリーは黙り込み、俯いた。罪悪感に苛まれてしまなっているのだろう。

俺は、シャーリーの肩にそっと手を当てる。

「アンタの『やった』ことが、正しかったのかどうかは、誰にも分からない。だが、『今からやる』ことに間違いはない、起こさせない」

「何が……言いたいのか?」

顔を上げるシャーリーに俺は再び唱え、背を向ける。

「挽回のチャンスってことだよ」

立ち上がり、剣の柄を握り締める。

「ああ。『俺たち』が、いるかな」

ヴィックも、

「ええ。あなたはもう1人じゃないのよ、シャーリー」

レイテも、

「皆で、最下層へ挑みましょう！」

ユリウスも、

考えは1つだった。

「敵は・・・強いわよ？」

「その方が気合い入る。もとより、侮るつもりはない」

そして、俺はある方向へ視線を定める。

「そろそろ出てこいよ。人喰いの魔獣【マンティコア】」

グルルルオオアアアアアア！！！！！！

茂みから1体の魔物、というより、獣が現れた。

こちらの隙を伺っているのには、俺はとうに気づいていた。

虎の如き雄雄しき出で立ち、血のように赤い真紅の毛皮、蠍トナリのような毒針が無数に生えた節のある長い尾、そして3列に並ぶ鋭い牙。

そして、魔物のみが生まれ持つ禍々しい邪気は他の魔物を凌駕して

いた。

もつとも、この迷宮に生息する魔物の中では、の話だが。

「森の守護者が、自ら御出ましとは……光栄だね」

剣を引き抜き、不敵に微笑む。

俺の感情は恐怖よりも快感が大きかった。何ごとも楽しむ、それが俺のモットー。

「少しは骨のある奴のようだな。っへへ……」

ヴィックも似たような想いのようだ。

「単純馬鹿はこれだから……ま、私も人のことは言えないか」

「後衛は任せてください」

「私も参加させてもらうわね。遅れた分はしっかり取り戻さないと、皆に笑われちゃう」

他も、決意を固める。

敵は1匹。

攻めるは5人。

果たす力は

「我にあり!!」

ここに、5人VS1匹の接戦が幕を開けた。

11時限目 傷心の女魔導士（後書き）

はい、新キャラクター登場です。

シャーリーは今後も、登場する予定です。

次回は中ボス戦（笑）です。

考えてみれば、1話まるまるバトルって初です。

なんとか埋められるよう努力します！

ご期待下さい。

でわでわ

ズシュツ！

グルウルルアアア！！！！

鈍い肉を裂く音と獣の激痛による唸り、そして傷から放たれる返り血で、俺は感覚が既に麻痺しかけていた。己の血の高鳴りを感じる。

「うおおおおっ！！」

上方から声がする。ヴィックがマンティコアに向かっているのだろう。

剣を引き抜き、感覚で後ろから来る拳を避ける。

ドカツ！

グルウウウウウ・・・

少し呻いている。そろそろ反撃が来るか・・・。

ブオツ・・・！！

マンティコアは、後ろ足を上に伸ばし、

ブウンツ！！

一気に下に潜り込む俺に蹴りかかった。

ガキイイインツ！！

「ぐうっ・・・！！」

剣の刀身でなんとか防ぐ。しかしこれはあくまで練習用の打剣。斬れるとは言っても、所詮鈍らの代物である。いつまでも頼れるわけではない。

ズザザアアアツ・・・

かなり押し返された。力だけは認めざるを得ない。かすり傷も少しできている。

「治療します」ポウツ・・・

「助かる」

ユリウスの介護によって、軽症はすぐ完治した。

マンティコアは、異様にパワーの強い相手だ。だがその分・・・

「せいやっ！」グオオアア！
「なんのおっ！！」オンガアアア！！

・・・単純同士の戦いは、本当に同レベルになるようだ。いや、低レベルか？

「ボサツとしてないでタスケロヨー！！」

「・・・やれやれ・・・じゃそろそろ行きますか」

「魔術コンビの腕の見せ所よ！」

レイテとシャーリーは、お互いに魔方陣を展開させる。そして、唱えた。

「我が命に従い、敵の足場を封じこめ！」

レイテが唱えた刹那、

シユルルルル・・・

迷宮に伸びる蔦が、

グウオオ！？

一気にマンティコアの四肢を絡めとった。

「獅子の四肢を取る・・・」

「「「「「「「「「「「「」

「・・・無言で俺から遠ざかっていくのやーめーてえー！！
ちよっと言ってみたかったただけなんだよおおおおお！！！！！！」

なんかヴィックが叫んでいたが、聞き流した。アイツはああなんだ、と最近は自分の中で言い聞かせるようにしている。

さて、両足を取った後、

「我が命に従い、その者に力を！」

シャーリーが唱えると、魔方陣から水の鞭が伸びた。そしてヴィックの腕に巻き付く。

「うお！何じゃこりゃ！？」

「まあ見てなさい・・・はっ！」

小さく唱えると、ヴィックの両拳には、水で出来た獣人の爪のようなモノが付いていた。

およそ人間の掌の10倍はある。

「おおー！！！」

「これが、ヴァッサー【水の術式】シユプリング・クロウ水銀の爪よ」

「これならいけそうだ、助かるぜ！」

ヴィックはマンティコアに向かって突進し、ギリギリの所で跳躍した。

そして、爪を思い切り振りかぶる。

「喰らえ！ドラウン・スクラッチ！！！」

ズザシユウウ！！

グルオオオオアアア・・・！！

ドシャアア・・・！！

魔獣は爪の猛攻に息絶えた。

「・・・っフ、見たか、この俺の実力を！」

「調子に乗るな」ビシッ！

高らかに拳を天に突き上げる（つっても天は見えないが）ヴィック

に俺はチョップをかました。

「あーッ！」

「シャーリーの補助魔法が無かったら、完全にアンタやられてたでしよ」

「む、う・・・まあそうだけど・・・」

「フフ、いいのよ。久々に私もいいとこ見せられたし」

「・・・はは」

ふふふ・・・ははは・・・

しばし談笑が、その場に起こった。

「・・・さて、行くか」

「ホントは、ギルド変更は半年後だけど・・・私も居ていいわよね？」

「まあ、この際アリなんじゃない？」

「次はどんなのが来るかね？腕が鳴るぜ」

「無茶はしないで下さいよ。ある程度なら治せますけど」

俺たちは、魔獣の亡骸を背に、階段を下った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2360v/>

Labyrinth ~大迷宮の探索者~

2011年11月5日16時09分発行